

まちやむら、そこに住む人びと（ざいち）の、知恵や生き方（=ち）から学び、実践する活動です。



京都大学

学際融合教育研究推進センター 生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

滋賀県大津市葛川梅の木町
安曇川本流と針畑川入口

守山フィールドステーション

機械化以前のコメ作り：田植えと草取り

守山F S 研究員 藤井美穂

滋賀県守山市洲本町開発（かいほつ）集落では、6月10日頃から同月末までの期間に田植えが行われた。以下はAさん（85歳）からの聞き書きである。

田植えの当日、前日に女性が苗代で束にした苗を男性が田に運んだ。田植えは、2人の男性による田引き縄から始まる。縦長の田の横の両畔に一人ずつが、長さ6尺4寸（約2m）のケンザオの間隔に2尺（60cm）の縄竹と呼ばれる竹をさしていった。その後、縄を2本ずつ両手にもって、畔を歩いて縄をはった。両手に2本の縄をもつことにより、1回の田引き縄で4本の縄を引くことができる。田引き縄が終わったあと、縄で区切られた枠内に女性が一人ずつ入る。

次に、男性が苗配りを行った。

「苗配りは、畦を歩く幅で次の苗の株をおなご（女性）に植えてもらう場所を計ってるんや」。

上（カミ）から下（シモ）に縦の畔を5歩歩いて、田植えをする女性の後ろに1束の苗を投げていった。

田植えは女の仕事だった。田引き縄の間隔約2mに3本1株の苗を横1列に8株植えて後に下がっていき、次の列を同様に植えていく。田植えが下手な人がすると田に「マゴ」ができる。マゴとは8株植えのところを9株植えたりして、苗が多く植えてあることをいう。マゴが入っていると、苗筋に手押し除草機が入りにくくなる。

村中の田植えがすんだ6月末頃、五月休み（さつきやすみ）とあって、在所では日をさだめて3日間の休みをとり、赤飯、餅、五目寿司、サバ寿司などのご馳走をつくり、他所にいる親類などに配った。

田の草取りには、「キカイツキ」と「ノタリ」がある。キカイツキとは、「タツヨコ」と呼ばれる手押し除草機を使って行う（写真参照）。ノタリとは、手で草を取ることである。田をのたる（這う）ようにして行うので「ノタリ」と言う。

6月、草が生える前にキカイツキを2回行った。

「用事のない午前中に草取りをした。田を10反し

ていたら、タツヨコで10反ともタツ（縦列）ばかりついてまわると3日でタツが終わる。今度はヨコばかりついてまわる。同じ1反でも、ヨコをつくのは、除草機を回す回数が多いので、ヒマがいった（時間がかかった）」。

キカイツキのほかに、細い草が生えてくると「カメ」と呼ばれる除草具（写真参照）で草取りを行った。カメで一筋ずつ土を上下に動かして草を弱らせて田にこすりつけた。

7月5日頃から1カ月間ノタリを行った。

「7月にはいると、家族で1番目のノタリの『あら草取り』をぼちぼちやりかけるけど、親父はしなかった。『気張り手や』と朝暗いうちから草取りをしていた。ヨコ8株の1株ずつのまわりを両手でかき回して、ちっこい（小さい）つまめへん草を土のなかに入れる。苗の株の所に土が寄っているのを外に広げるような気持ちでするのがコツや。株のネキ（根元）をあけるんで、ブンケツしよいんや（苗の茎数が増えやすい）。2、3日おいて、からだ休めに畑仕事をしてから2番目のノタリの『あげどり』をした。あげどりは、株に土をよせる心持ちでかき混ぜるんや」。

10反の田のノタリを終えるのに、ほぼ10日間かかった。あげどりは土用の丑の頃までに終わった。草取りが終わると田の水を抜いて、7月末からお盆まで「ドヨボシ」（土用干し）をして田の表面にヒビが入るまで乾かした。（つづく）



左端は手押し除草機、真ん中は糸繰り機。その横の柄に「ブラシ」がついたものが「カメ」呼ばれる除草具、竹の柄で「ブラシ」は木に鉄の歯がついている。（開発集落の納屋で撮影）

自立・分散型の地域づくり

朽木 FS 黒田 末寿

福島原発事故以降、「自立・分散型の地域・まちづくり」という言葉が目立つようになった。たとえば、環境省は来年度重点施策のなかで、「持続可能な社会の実現に向けた取組として、環境負荷が小さく、災害にも強い自立・分散型のまちづくり、地域づくりを進める」としている。自立・分散の言葉は、システム工学の自律分散系、独立的な多数のユニットが連携し合い自己と全体の安定性や成長をはかるようなシステムの転用である。このシステムでは、あるユニットで生じた問題はそのユニットないし近傍ユニット間で調整・解決する能力をもち、一部の故障が全体を機能麻痺させることがない。

要するに自立・分散型の地域づくりは、それぞれの地域や地域間ネットワークで再生可能エネルギー利用や食物・資源の地産地消を高め、災害にも自主的に対処できる危機管理体制を整えるということだ。それには、エネルギーと資源面で地域社会の持続可能性が高いことがキーになる。

昔の地域は自立・分散型だった

ところで、一昔前の村落は、「自立・分散型の地域」にほかならなかった。

たとえば、かつての雪深い地域では、半年近い孤立に耐える備えと工夫があり、むしろ雪を利用して猟や木の伐り出しをし、布を晒し、凍み大根・凍り豆腐など作り、室内では機織りや細工物をした。炭焼きも多くは冬にした。困難な季節を充実した時に変える工夫は、祝い事や儀礼を欠かさず、村内の寄り合いや交流を楽しむことにも現れている。こういう村では、飢饉に備えてヒエを蓄えもし、水車やガッターで水のエネルギーを上手に利用していた。災害にはすぐに村中で力を合わせ対処した。

こういう生活を振り返るとき、いつも感銘を受けるのは、村の人たちが多くの技能を持っていたことである。だれでもいくつかの仕事をこなし（＝百姓力）、個人や家族のレベルで自立的・持続的生活を営んでいた。協力すれば用水路の補修や崩れた道路の復旧も自分たちでできた。今日でも、多くの技能をこなすいろんなタイプの百姓力をもつ人がいれば、そういう人たちを核に全体として持続可能性の高い地域ができるだろう。

高知県梶原町

しかし、持続可能性を高める地域づくりには、一方で、行政の役割が決定的になる。地域づくりの成

功のキーは、行政が住民の主体性を尊重し、地域資源と人材を生かす仕事を明確にして支援・創出することである。昨年8月に小水力発電研修で今北研究員とともに訪れた高知の梶原町はその学ぶべき大事な例である。私たちは1月に前町長の中越武義さん（在期 1997～2009）に滋賀県立大学で、「自然エネルギーによるまちづくり」の講演をしていただいた。

梶原町は人口約4000人、91%が山林の町である。中越さんは町民が一体でまちづくりできるよう提案を募るところから始め、1999年に風力発電を2基設置、売電による年間3千万円余の収益をもとに他の自然エネルギー利用と林業振興を進めた。

放置状態の森林に施業助成金を出し、木質ペレット工場を造って、間伐材を燃料ペレットにしストーブ、ボイラーに使う。広葉樹はキノコの菌床にして販売。

町の施設はホテルや橋も含めて町産

材と町の大工で造り、木造住宅を建てる人にも町産材を支給。こうして林業が活性化し雇用が生まれた。森林セラピーコースを整備して、観光客を呼び込み、地熱と木質ペレットを利用するホテルに泊める。小水力発電所を2基造って町立学校と街路灯に使い、太陽光発電を町施設すべてに設置、太陽光発電取り付けに助成金を出して町内での普及をはかっている。この結果、現在町で使用しているエネルギーの30%弱を自給。将来、風車を増やしてエネルギー自給100%を目指している。

地域にあるもので工夫し、最大限の活用を多角的に展開し、資金を上手にうちで回すやり方は、発想レ

ベルの百姓力といえる。これは中小企業でも総合商社でも同じといえばそうなのだが、自分たちの町と子どものために持続可能な地域をつくるという目標が決定的に異なっている。



梶原町の木質ペレット工場、
間伐材を有効利用



梶原町の森林組合の工場「森林価値創造工場」という看板

亀岡フィールドステーション

筏がつなぐまち～保津川筏復活プロジェクトの意義を考える⑤

大阪商業大学経済学部 原田 禎夫

近年、保津川は大量の漂着ゴミ、水質悪化や水生生物の急激な減少などさまざまな環境問題を抱えている。このような中、2006年に保津川開削400年を迎えたのを機に、流域住民による河川環境保全に向けた取り組みが本格化し、その一環として「筏」をシンボルとして、流域のつながりの再構築を模索する「保津川筏復活プロジェクト」が始まった。

このプロジェクトの実施主体である保津川筏復活プロジェクト連絡協議会の大きな特徴として、代表や規約を設けていないという点がある。これは「ゆるやかな連合体」を目指すうえで、特に必要性がないうちから代表や規約を設けることで上下関係が出来てしまい、継続的な取り組みを妨げることが懸念されたからである。また、構成メンバーが「自分たちの得意なこと」を持ち寄る、という方針が貫かれている。たとえば筏組みや筏の操縦は遊船の船頭が担当し、学術的な調査・記録は亀岡市文化資料館や各大学が担当するほか、河川利用の許可申請や広報などについては京都府南丹広域振興局が担当している。

協議会には流域のNPOも積極的に参画しているが、これらのNPOの特徴として、自治会をはじめとした旧来の地縁組織等と良好な関係性を築いることが挙げられる。高度成長期以降、保津川流域の各市町はベッドタウンとして人口が急増した一方で、いわゆる新住民と旧住民の間には少くない関係性の断絶があるが、これらのNPOはそれぞれの方法で両者との間で関係性の構築に取り組んできた。このことが、たとえば筏流しに用いる材木の寄附を取り付けたり、地元自治会による里山再生事業での材木の再利用を実現したりといったことにもつながっている。

NPOがこの協議会で果たしている役割の中でもう一つの重要な点として、外部資金の獲得が挙げられる。このプロジェクトは、行政の補助金や大学の研

究資金のほか花王コミュニティミュージアム・プログラムにも採択されている。これはプロジェクト保津川と亀岡市文化資料館が中心となって応募したものであるが、このような“有名な企業”からの資金援助は、地域の住民や行政職員に対してNPO＝ボランティア団体、という認識を改めさせただけではなく、事業実施にあたって外部の評価を受けるということが協議会メンバーの間にも一種の緊張感を持たせる結果となった。また、この助成金の獲得は、「資料館のような専門的な施設はどうしても内向きな発想になりがちの中で、資料館がやりたいことではなく、市民がやりたいことに一緒に取り組んでいる他地域の取り組みは非常に刺激になった」「文化行政の予算が毎年削減される中で、NPOと手を組んでの民間の外部資金の獲得という方法は参考になった」（資料館元学芸員）といった刺激を与えることにもなった^[1]。

このように協議会は多様な団体により構成され、その過程においていわゆる橋渡し型のソーシャル・キャピタルとしての機能を徐々に獲得してきたとみることができる。



保津川筏復活プロジェクト 2011 いかだにのってみよう
(京都府亀岡市保津町)の様子

[1] たとえば、森林環境ネットワーク（南丹市）はIターン者の支援や地域の子供向けのイベントを積極的におこなっているほか、プロジェクト保津川（亀岡市）はオンライン・ゴミマップを開発し、自治会などとの協働による漂着ごみのモニタリングや河川清掃などを実施している。

催しのご案内

■ 43回 定例研究会

1. 日時：平成24年2月24日（金）16:00～19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）
3. 最終報告書草稿の発表および検討

*参加希望者は、京都大学 東南アジア研究所 実践型地域研究推進室
担当：矢嶋 yajima@cseas.kyoto-u.ac.jp)までご連絡ください。

■環境フォーラム -エネルギーの地産地消-

題目：「小水力発電の可能性について」

講師：倉坂秀史氏（千葉大学法経学部教授）

日時：平成24年2月5日（日）14：00～15：30

会場：長浜勤労者福祉会館「臨湖」多目的ホール（長浜市港町）

入場料：500円（中学生以下無料）

問い合わせ・申込み：「臨湖」tel：0749-65-2120

主催：芸術村IN余呉実行委員会

マニンジャウ湖のペンシ、琵琶湖の瀬田シジミ

総合地球環境学研究所 アミ・A・ムティア

ペンシはマニンジャウ湖で獲れるシジミです。学名は *Corbicula molikiana*。マニンジャウ湖の漁師は、毎日朝6時頃からペンシを採ります。ペンシを獲るためにはダウフ（Dauh：写真1）やカルジュン（Karujung：写真2）を使用します。



写真1 ダウフ

カルジュンは、最大2メートルぐらいの水深の所でペンシを獲るための漁具です。カルジュンを湖底に沈めて、漁師が水に潜りながら泥や砂に隠れているペンシをヤシの殻で網にかき入れます。水深が2メートル以上の場所では、ロープの先に取り付けたおもりの付いたダウフをカヌーから湖底に沈めます。そうして、ロープを引きながらカヌーを湖畔まで走らせます。湖畔で、水から引き上げた泥だらけのペンシを洗い流すと、たった一回でカヌーがペンシでいっぱいになります（写真3）。

漁師はマニンジャウ湖で一日1トンぐらいのペンシを獲ります。その半分ほどを西スマトラの都市（ブキットティンギヤパダンなど）で売



写真2 カルジュン



写真3 ダウフに載せたペンシ

り、残りはマニンジャウ湖の周辺で、生のままか、あるいは調理して売ります。買ってそのまま食べるために販売されるペンシは、殻が閉じたまま調理され店に並びます。一般家庭では、殻をむいたペンシ（ウライペンシ）をカレーにしたり、トウガラシと炒めます。昔から、マニンジャウ湖では住民や観光客にとって欠かせない食べ物として、ペンシは愛されてきました。

一方、琵琶湖では瀬田シジミ（*Corbicula sandai Reinhardt*）が有名です。瀬田シジミは殻が固く、厚い肉が特徴です。残念なことに、水質汚染のせいで、今、瀬田シジミはあまり獲れません。しかし、琵琶湖の北側の水がまだきれいな所では、今でもネットを使ってシジミが養殖されています。

昔、琵琶湖ではシジミが沢山獲れました。漁法は、マングワと言う鉄棒に網を付けた貝引網という漁具を湖底に沈め、漁船を引き回して獲るといいます。この漁法は、ダウフと似ています。

琵琶湖ではシジミをみそ汁、すまし汁、佃煮などにして食べます。

子どもの頃から琵琶湖の近くの真野浜に住んでいる藤田さん（80代）は、小学校の帰り道に寄り道をして、琵琶湖湖畔でシジミを獲りリュックサックに入れてお母さんに怒られたことがあったといいます。シジミがとても豊富だったので、水草をかき分けるとその下から簡単にシジミが沢山獲れたそうです。周辺の農地から農薬汚染された水が琵琶湖に流入し汚染がはじまるとシジミは少なくなりました。現在、また少しずつ増えはじめているそうです。

貝類は水質汚染に敏感な指標生物です。シジミがいるかどうかを確認するだけで、水質が汚染されているかどうか簡単にチェックすることができるのです。